ЛЕНИНГРАД
ЛЕНИНГРАД
ЛЕНИНГРАД
ЛЕНИНГРАД
ЛЕНИНГРАД
ЛЕНИНГРАД
ЛЕНИНГРАД
ЛЕНИНГРАД
ЛЕНИНГРАД
ЛЕНИНГРАД
ЛЕНИНГРАД



ЛЕНИНГРАД
ЛЕНИНГРАД
ЛЕНИНГРАД
ЛЕНИНГРАД

THE NEW SYMPHONY ORCHESTRA 76th Concert

指揮　芥川也寸志

交響曲　第7番　ハ長調作品60……ドミトリー　ショスタコービッチ
Symphony No. 7 C dur Op. 60……Dimitry　Shostakovich

——レニングラード市に捧ぐ
——dedicated to City of Leningrad

第1楽章　アレグレット
1st. Mov.　Allegretto

第2楽章　モデラート（ポコ アレグレット）
2nd Mov.　Moderato　(poco allegretto)

第3楽章　アダージォ
3rd Mov.　Adagio

第4楽章　アレグロ ノン トロッポ
4th. Mov.　Allegro non troppo

1977年4月4日(月)　午後7時
東京文化会館大ホール

交響曲 第7番 ハ長調 作品60
―レニングラード市に捧ぐ―
D.D.ショスタコービッチ

D・D・ショスタコービッチは、1906年にペテルブルグに生まれて、1975年にモスクワで亡くなった。ソ連の大作曲家である。彼はわずか19才で交響曲第1番を作曲して以来、生涯に15曲の交響曲と、同数の弦楽四重奏曲を始めとする、多くの室内楽作品、あるいは声楽曲とか映画音楽など、150に及ぶ作品を作っている。

この第7番の交響曲は、彼の交響曲の中で最も規模の大きな作品である。1941年7月19日に着手され、9月3日に第1楽章、9月17日に第2楽章、9月29日に第3楽章、そして12月27日に全曲の完成をみた。初演は1942年3月5日。当時、臨時政府がおかれていたクイブイシェフで、サミュエル・サモスード指揮、モスクワ・ボリショイ劇場管弦楽団により、行われた。レニングラード初演は同年8月9日。カルル・エリアスベルク指揮、レニングラード放送管弦楽団による。

〔背景〕……1941年6月22日、ナチス・ドイツ軍は独ソ不可侵条約を一方的に破棄し、ソ連に侵攻する。8月末には、レニングラードは包囲され、3年近くにわたって攻防戦がくりひろげられる。

レニングラード生れのショスタコービッチは、開戦されるや赤軍に志願するが、政府は音楽家として祖国のために尽くすよう、彼を説得する。結局、彼は母校レニングラード音楽院の屋上監視員という仕事を与えられ、その傍ら新しい交響曲を作りあげることになった。戦火の中で作曲は進められ、異常とも思える速さで完成をみた。

翌年、初演の模様が全世界に向けて放送されると、海外でも国内に劣らぬ熱狂的な反響を呼びおこし、総譜がマイクロ・フィルムにおさめられ、テヘラン――カイロ経由でニューヨークやロンドンへ空輸された。そして、トスカニーニ、ストコフスキー、といった大指揮者が初演権を奪い合うといった事態すら招いたのである。

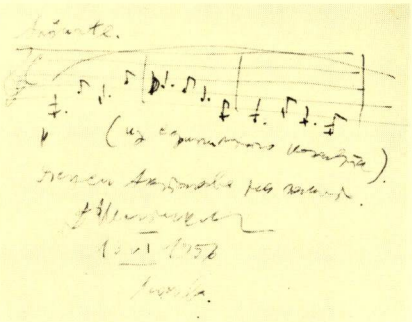
〔編成〕……フルート：3（II―― アルト、III―― ピッコロ）
オーボエ：2、イングリッシュ・ホルン
クラリネット：3（III―― ピッコロ）バス・クラリネット
ファゴット：2、コントラ・ファゴット
ホルン：8、トランペット：6、トロンボーン：6、テューバ
ティンパニ、タンブリン、トライアングル、小太鼓、大太鼓、
シンバル、タムタム、木琴、ハープ、ピアノ
弦5部

作曲者は、この曲に関して次のように述べている。

「交響曲第7番は、1941年の恐しい出来事に霊感された標題音楽である。それは4楽章からなる。第1楽章は、私たちの楽しい平和な生活が戦争の不吉な力によっていかに打ち砕かれたかを物語る。

私は決していわゆる戦争音楽を書いたのではない。私の試みたのは、そのような苛酷な出来事の精神と本質を表現することだった。……戦争の主題は中間部を支配している。

第2楽章は、幸福だった時代と出来事を回想する叙情的なスケルツオで、一抹の憂愁をおびている。第3楽章、生活の忘我の愛と自然の美とを



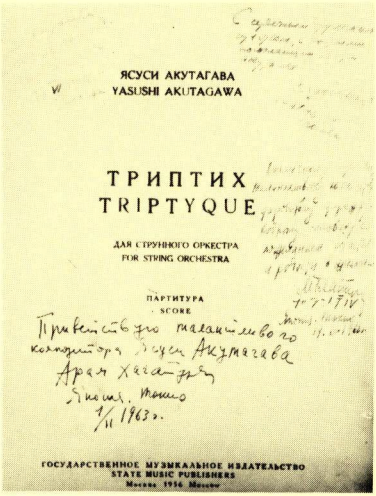
作曲者のメモ（交響曲第11番）

表現する悲愴なアダージオは、第１楽章と同じく交響曲の基礎となる第４楽章へと、中断なく続く。第１楽章は闘争を表現し、第４楽章は近づく勝利を表現する。」

「最初のもっとも長大な楽章は、ドラマティクで、また悲劇的な性格に支えられている。私たちの平和な生活は、戦争という恐しい出来事のために打ち砕かれ、すべてはその法則に従属しなければならなくなった。この楽章には、別の楽想も出てくるが、それは戦争のため命を奉げた英雄たちに寄せる人々の悲しみを表わすレクイエムである。」

「次の２つの楽章は、間奏曲を意図したもので、戦争とは対照的な生活を描いている。私は、芸術、文学、科学が、戦争のさなかにあっても進歩と発展を続けなければならないという思考を表明しようとつとめた。それは〔大砲がうなりを発するとミューズは沈黙する。〕という格言に挑んだものだと考えていただいてもかまわない。」

「第４楽章は、我々の勝利に捧げられている。それは、第２楽章と第３楽章に直接つながる、論理的な帰結である。つまり、暗黒に対する光明、狂気に対する叡智、怪物のような暴政に対する、気高いヒューマニズムの勝利である。」



芥川也寸志に寄せられた、ショスタコービッチ、カバレフスキー、プランテル、プロコフィエフのサイン

全曲は４楽章からなり、第３楽章はアタッカで第４楽章に引き継がれる。

〈第１楽章〉　アレグレット

３部形式による。冒頭の弦のユニゾンによる力強い第１主題は、「レニングラード市民の主題」あるいは「人生肯定の主題」と呼ばれる。続く第２主題は、７拍子、10拍子なども交え、ショスタコービッチ独特の朗唱的性格を見せる。

中間部は、小太鼓の規則的なリズムの上に展開される変奏曲である。この変奏曲は「戦争の主題」と呼ばれ、11回変奏されて息の長いクレッシェンドを示す。

〈第２楽章〉　モデラート（ポコ・アレグレット）

冥想的、牧歌的な主部と戯画的な中間部より成る、３部形式のスケルツォである。

〈第３楽章〉　アダージォ

この楽章も３部形式による。冒頭、アダージオのコラールと、ラールゴのレシタティーヴォの交錯は、宗教的でさえある。フルートによる牧歌的な主題に続き、モデラート・リゾルートの中間部が戦争の影を思い起こさせる。

〈第４楽章〉　アレグロ・ノン・トロッポ

ティンパニのトレモロによって第３楽章から休みなく引き継がれる。変則的なソナタ形式と見ることができる。

１ｓｔヴァイオリンと低弦によって提示されるハ短調の主題は「勝利の主題」と呼ばれ、この楽章を一貫して流れている。後半のモデラートでは、先行楽章の動機が用いられ、徐々に高揚する。そしてクライマックスで「人生肯定の主題」が再現し、ハ長調の和音の上に、ティンパニによる「勝利の主題」が、ハ短調のまま奏され、全曲を終わる。

＊　＊　＊　＊

新交響楽団はこれまで誰にでも親しめるいわゆる名曲を多く演奏してきましたが、常に切符の売れゆきを気にせざるを得ない日本の音楽界の中で、あまり演奏されることのない曲をとりあげることもアマチュアの使命であると考え、今回はショスタコービッチの第７番に挑戦します。


ショスタコービッチと芥川也寸志
1956年頃

芥川也寸志と新交響楽団　昭和51年度・第８回鳥井音楽賞受賞

〈鳥井音楽賞とは〉

「鳥井音楽賞」は、サントリー㈱が創立70周年を迎えた昭和44年２月に、創業者である鳥井信治郎翁の遺志、「社会文化文化事業への貢献」を引き継いで設けられたものである。この賞は、その年度に日本のクラシック音楽の発展、向上に最も寄与した日本人に贈られるもので、（賞状・記念品・賞金百万円）財団法人鳥井音楽財団（理事長、佐治敬三）がこの運営にあたっている。その第８回（昭和51年度）の賞を「芥川也寸志と新交響楽団」が受賞した。

同賞をアマチュアが受賞したのは初めてである。受賞式は去る３月５日(土)、東京会館で、著名音楽人多数を招待して行なわれた。



〈歴代受賞者〉

第１回　小林道夫（Cem）
第２回　堤　剛（Vc）
第３回　三谷礼二（オペラ演出）
第４回　小川　昇（音楽図書研究）
第５回　ＩＣＵオルガン委員会
第６回　秋山和慶（指揮）
第７回　栗林義信（Br）　山根銀二（評論）
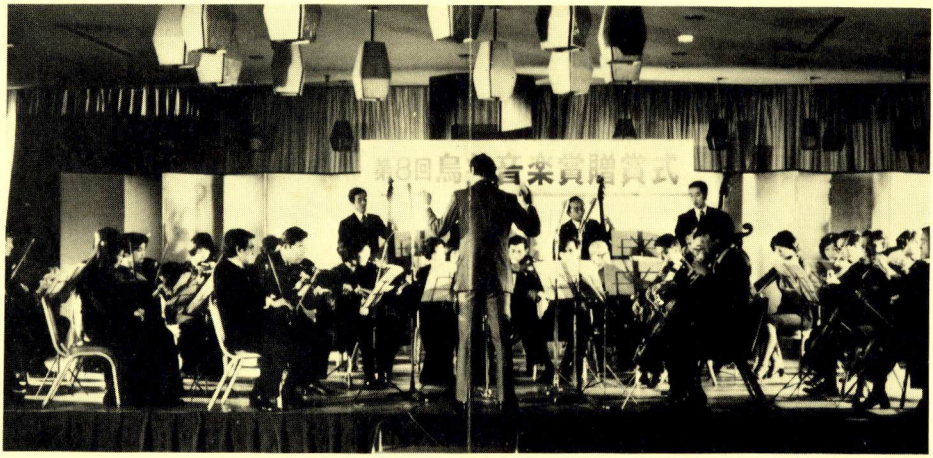
〈芥川也寸志と新交響楽団の推薦理由〉（要旨）

1976年9月3日と10月11日の2日間にわたり、東京文化会館大ホールでおこなわれた「日本の交響作品展」(昭和８年～18年）と名付けた演奏会は、ほとんど名声のみで実質的には埋もれていた同時代における代表的な日本のオーケストラ作品を発掘・再現した企画であったことと、個々の作品の特質を適確に把握したきわめてすぐれた演奏内容により、1976年内におけるもっとも傑出した音楽会であり、我が国の創作・演奏両面にわたり少なからぬ示唆と刺激をもたらし、音楽全般に寄与・貢献するところが絶大であった。

新交響楽団は1956年３月、芥川也寸志氏がアマチュア演奏家を集め設立し、氏の企画指導により翌年11月の第1回演奏会以来たゆまぬ日常的な訓練と演奏活動を持続し、1976年秋までに74回の演奏会を行ってきた。そして創立20周年記念として実現した「日本の交響作品展」は２夜にわたり、それぞれ５名ずつの作曲家によるこの時期の代表作10曲を編成し、文献・記録などによって注目されながら、さまざま障害から演奏不可能とされてきたこれらの作品をきわめて入念・忠実に再現することで、過去の作曲家たちによる業績を明らかにし、聴衆に多大な感銘をもたらすとともに、日本人の手になるオーケストラ音楽に改めて再評価の機会を与え、その作曲法・創作態度を通じて専門家にも少なからぬ影響をもたらすところとなった。とりわけ、日本のオーケストラ界全体における日本人作品の企画・演奏の機会がとぼしい現状において、彼らの演奏会は新風を注ぎこむものとしてきわめて大きな意義をそなえている。







〈鳥井音楽賞を受賞して〉　Vla　岡本　明

ヘンデルの勝利のテーマと共に、鳥井音楽財団の佐治理事長から芥川先生に賞金と副賞、新響の松木理事長に、団員一人一人にも贈られる記念品が代表して手渡される。来賓の文化庁長官や音楽家、評論家諸氏の祝辞が続く。東京会館に於ける第8回鳥井音楽賞贈賞式で、受賞記念演奏をすべく設けられた舞台の上に私は終始緊張して座っていた。その製品には毎夜親しんではいるが、サラリーマンからみれば雲の上の人、サントリーの佐治社長が親しく我々のために挨拶をして下さっている。偉い音楽の先生方が間近に居られる。緊張するのも無理もない。草野球で、少しは強いチームだ、位に思っていたのがある日突然日本シリーズの優勝チームになってしまった様なものだ。

創立20周年の記念に何か有意義な企画を、と云うことで、芥川先生から邦人作品だけのプロを提案されたときには、それがどの様な意味をもつものか、またこの様な形で実を結ぼうとは考えてもみなかったのである。芥川先生は非常な熱意をもってこの企画を先頭に立って推進された。芥川先生が居られなければこの企画は存在しなかっただろうし、今日この席に座ることも出来なかったはずである。はじめは芥川先生だけが受賞したものと思ったのだが、新響も含まれていると知ったときはちょっと信じられない気がした。我々が本当にそんな大きな仕事をしたのだろうか。確かに資料集めは苦労したし、久しぶりに手分けしての写譜もやった。しかしそのほかはだいつもと同じ様に集まって練習をやり、演奏会をやっただけなのだ。たまたま曲が邦人作品だっただけなのだ。それが我国の音楽界に多大な貢献をした、と評価され賞を頂くことになろうとは、えらいことになった、と云うのが実感である。

だが現実に今ここに贈賞式は着々と進行している。芥川先生が受賞の挨拶をしているのだが、テレビ司会者や随筆家と思われ、「作曲もなさるんですか」などと云われる程ふだんは弁舌さわやかな先生が、ぐっとつまってしまって言葉が続かない。このとき私は改めて先生の喜びの大きさ、新響に対する愛情の深さを知らされた。松木理事長に先生に恩返しが出来た、と挨拶したが、受賞式で芥川先生の「トリプティーク」を演奏出来たことは、正に恩返しにふさわしいものであったと思う。緊張のためにだいぶ乱れてしまったのは残念だったが。

この受賞によって我々がうまくなった訳でもないのだが、何となく自信が出て来た様な感じもする。今後もアマチュア音楽家としての領分を守りながら、新たな曲に挑戦して行きたいと考えている。さあこれからが大変だぞ。

鳥井音楽賞コンサート

曲　　目　日本祭礼舞曲……清瀬保二
古代の舞曲……早坂文雄
小交響曲ニ長調……箕作秋吉
日本組曲……尾高尚忠
交響譚詩……伊福部昭
（曲目は多少変更あり）

指　　揮　芥川也寸志

演　　奏　新交響楽団

日時・会場　8月4日(木)　午後7時　東京文化会館大ホール
8月7日(日)　午後2時　名古屋市勤労会館
8月8日(月)　午後6時30分
大阪・フェスティバルホール

入 場 料　500円